

TOPICS 今号のトピックス

- 被爆・平和関連番組のNHK・民放合同上映会 広島と長崎で開催
- 公開セミナー 第46回名作の舞台裏 NHK大河ドラマ『花の乱』
- 「大おじゃる丸博」、夏休み体験教室 開催
- サテライト・ライブラリーおよび大学教育での番組利活用
- 第4回番組を視聴する会 開催
- 放送ライブラリー公開番組の紹介

■被爆・平和関連番組のNHK・民放合同上映会 広島と長崎で開催

今年の夏も、放送番組センターと広島・長崎のNHK、民放テレビ局が連携し、被爆・平和関連番組の上映会を開催した。上映した番組は各局が制作したドラマやドキュメンタリーなどで、一部を除き、放送ライブラリーの公開番組の中から自社が制作した番組をピックアップしたものである。各番組の権利者から著作権、肖像権等の許諾を得て、横浜の放送ライブラリーと会場をインターネット回線で結び、ストリーミング送信して上映を行った。

昨年と比べ、広島では来場者数が大幅に増加した。長崎は昨年より短期間の開催となったため全体の来場者数は減少したが1日あたりの来場数は増えており、本上映会のこれまでの開催実績と広報活動が奏功し、毎夏の恒例行事として認知されてきた様子が窺えた。

【広島】

NHK・民放番組上映会 2018

テレビが記録したヒロシマ

期間：8月11日～15日（計5日間）

会場：広島平和記念資料館 メモリアルホール

主催：NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ、
広島ホームテレビ、テレビ新広島

共催：放送番組センター、広島平和記念資料館、広島市被爆70年（平成27年）を機に開始した広島での上映会は今年で4回目となり、昨年に引き続き、広島市と広島平和記念資料館の協力を得て、広島平和記念資料館メモリアルホールで実施した。



上映番組は広島の5局が制作した合計13本で、資料館を訪れる多くの外国人観光客に向けて全編英語字幕版として再編集した番組や、1982年に放送された番組、2017年のギャラクシー賞奨励賞受賞番組といった、時代や言語を越えて様々な視点から被爆と平和につ

いて考えることができるラインナップとなった。

5日間の来場者は2,379人で、前年比約1.9倍ののぼった。多数の来場者から「今後も上映会を続けてほしい」との反響があり、「放送時に見逃してしまった番組を見ることができた」「外国の人と一緒に見ることができてよかった」などの感想が寄せられた。

【長崎】

NHK・民放4局番組上映会

テレビが伝えた被爆の記憶 from ナガサキ

期間：8月13日～15日（計3日間）

会場：長崎原爆資料館 原爆資料館ホール

主催：NHK長崎放送局、長崎放送、テレビ長崎、
長崎文化放送、長崎国際テレビ、長崎市

共催：放送番組センター

協力：長崎原爆被災者協議会

今年で3回目となる長崎での上映会は、今回も原爆資料館ホールを会場として実施した。

上映番組は長崎の5局が1997年から2018年に制作した合計10番組で、いずれも被爆地ナガサキの放送局ならではの視点で制作された作品であり、平和へのメッセージが託されている。

上映会の周知活動の一環として、1日で約2万2千人の往来がある長崎駅と、複合商業施設アミュプラザ長崎に隣接したイベントスペースの「かもめ広場」において、各局のアウンサーが登場しているポスターや、上映スケジュール、各番組の内容を紹介するパネル、各局が長崎県内で放送したこの上映会のCM映像などを展示し、行き交う人々の注目を集めた。

今年も会場の出入口近くには、180センチ四方ある「寄せ書きパネル」を設置し、来場者は上映番組を見て感じた平和への思いをパネルに書き込んだ。

3日間の来場者は616人で、前年と比べ1日あたり1割増の来場者数であった。



■公開セミナー 第46回名作の舞台裏 NHK大河ドラマ『花の乱』

9月29日、テレビドラマの制作者や出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」を開催した。今回は、NHK大河ドラマ第33作、室町時代後期、戦国の世へ導いた応仁の乱のきっかけを作った悪女として名高い足利義政の妻・日野富子の波瀾の生涯を描いた『花の乱』を取り上げた。『花の乱』は、脚本の市川森一が、“稀代の悪女”と評された日野富子を独自の解釈を加え、新たな人物像で描き出した、大河ドラマの異色の作品である。

[ゲスト] 三田佳子（出演）、三枝成彰（音楽）

村上佑二（演出）、木田幸紀（制作）

[司会] 渡辺紘史（放送人の会）

セミナー冒頭、司会の渡辺氏が「『花の乱』は、放送された当時、大河史上最底の視聴率だったが、作品の質が素晴らしいと言われ続けてきた」と紹介すると、村上氏が「何より印象深く覚えているのは、視聴率が



村上 佑二

ワースト1だったという事」と笑った。村上氏は、『国盗り物語』、『花神』、『花の乱』と同じ市川森一脚本の『山河燃ゆ』の4本の大河ドラマを演出している。『花の乱』の企画のきっかけについて木田氏が「大河ドラマは通常は1年1

作だが『花の乱』とその前の2作『琉球の風』『炎立つ』は半年、または9か月と変則的だった。この3作は、大河ドラマを軸に様々な事業展開を行うという発想のもと、NHKエンタープライズで制作された。そのためスタッフに、今まで誰も見たことのない大河ドラマを作る、大河ドラマの常識を打ち破るという思いがあり、『花の乱』は、大河ドラマ史上初めて、室町時代に正面からぶつかった」と語ると、三田氏も「室町の狂気というか、未だかつて、テレビドラマで表現されたことのない世界をやるというプレッシャーがあった」と振り返った。



木田 幸紀

三枝氏が作曲した『花の乱』のテーマ音楽は、大河テーマ音楽の中でも傑出した作品であるといわれている。ピアノのソロで静かに始まり、徐々に弦楽器が加わり、後半に向けて盛り上がっていく。三枝氏は「大



三枝 成彰

河ドラマのオープニングというのは、武将を乗せた馬が走っていくイメージ。『花の乱』は女性が主人公であり、三田さんに相応しい、たおやかなものを作りたいと思ったが、今までの大河ドラマの概念と違うので、説明しても通らないと思い、レコーディングの日まで『出来ていない』と嘘をついていた」と当時のエピソードを明かした。三枝氏の曲を聴く前から、タイトルバックのイメージを考えていたという村上氏は「初めて聴いた時に、全然驚かなかった。室町というのは夢幻能が出来た時代なので、橋懸の向こうからこの世の人でない人が出てきて物語を始める、いわゆる彼岸と此岸の対立点を、一本の橋の上でまとめると考えていた。そうしたらぴったりの音楽が出来あがってきて喜んだ」と話すと、三田氏が「今、聴いてもジーンとする。三枝さんのコンサートでは、20年以上前のこのテーマ曲を未だに演奏してくださる。それ程、力のこもった名曲だと思う」と続けた。三枝氏はテーマ曲だけではなく、『花の乱』の全ての音楽を担当している。当時は、音のないドラマを貫って、それに合わせて曲を付けたという。劇中、様々な場面で、三枝氏の音楽が物語をひきたてている。

第24作の『いのち』に続き、大河ドラマの主演は2度目だった三田氏は、日野富子を演じるのにあたり、撮影が始まる前、京都の富子の墓を訪ねた。「権勢を誇ったはずの富子のお墓が、小さく、寂しい場所にあった。その時、富子というのは思っ



三田 佳子

ていた人とは違うのではと思った。歴史の中で、あの当時、近代的で、頭も良く、時代を先取りしていた。將軍に逆らう事はいくら正室であってもできない時代にあれだけのことを言った。そういう人だからこそ悪女とされてしまったのだろうと感じた」という。富子像について、三田氏は、市川森一氏とFAXで様々な意見交換をした。当時、市川氏と交わしたFAXも会場に紹介された。市川氏との思い出について木田氏は「市川さんは、この作品に全身全霊で打ち込まれていた。それを我々スタッフが追いかけていった」と話した。

ここで、三田氏が当時の過酷な撮影スケジュールを明かした。木田氏が「簡単に撮れるような内容ではなかった。申し訳ない」と謝ると、三田氏が「だからこんな素晴らしい作品が出来た」と微笑んだ。村上氏が「ここに市川さんが居ないのが最大の悲しみ。市川さんのセリフには心の中をじっと覗き込む深みがある。そう



いうセリフを書ける人は今はあまりいない。今、彼に本当に感謝を述べたい」と加えた。

最後に、渡辺氏が、『花の乱』を執筆していた当時の市川氏の言葉を紹介した。「今のテレビドラマは視聴者のレベルを相当低いところにおいている。(中略)大河ドラマまでがそこに流されていってしまうという安売りで点数を稼ぐようなドラマづくりは断固したくない。歴史ドラマはその内容が持っている娯楽性と同時に歴史の確証というもの、つまり、大げさに言えば民族の誇りといってもいいと思うが、究極的には個々の誇りに繋がっていく。その姿勢は貫きたい。演じる人も、ドラマの作り手も、自分は『花の乱』に関わったとずっと誇りとして持ち続けることができる脚本を書き続けたい。それが脚本家にできる唯一のことと思う」

心に沁みる音楽と物語を堪能すると共に、作品に向き合った登壇者の当時の想いを強く感じる会となった。

■大おじゃる丸博 ～"まったり"のすべて～

6月29日～9月9日、「大おじゃる丸博 ～"まったり"のすべて～」を開催した。



アニメ『おじゃる丸』(NHK Eテレ)は、今年10月に放送開始20周年を迎えた。登場キャラクターの人形やパネルの展示、体験型映像で『おじゃる丸』の作品世界を紹介した。主人公が千年前の世界と現代を往来するために使う「満月ロード」をブラックライトで表現するなど、来場者がアニメの世界に入り込んだように感じられる空間を構成した。移動するキャラクターとアイテムを組み合わせて、キャラクターを变身させるアトラクション「つかまえて、へんし～ん」(下写真参照)は、連日多くの子供たちで賑わった。また、平安時代の貴族の暮らしを紹介する学びのコーナーや、アニメを作るのに必要な設定資料の展示、ぬり絵コーナーなども好評だった。

アンケートには、「孫と一緒に来た」「自分が子供の頃好きだったおじゃる丸を、子供と一緒に楽しむことができた」などの声が寄せられ、親子三世代、子供から大人まで楽しめる内容となった。



■小中学生向け夏休み体験教室を開催

本年も、各助成団体の助成を受け、夏休み恒例の小中学生向け体験教室を開催した。

◇アナウンサー体験教室 7月26日(木)

フジテレビのアナウンサー3名が、小学4～6年生を対象に、アナウンサーの仕事についての話や発声練習、ニュース原稿読み指導などを行った。その後放送ライブラリー内のニューススタジオで本番を体験し、体験の様子を録画したのを見ながら、それぞれ講評をもらった。参加者35名。(放送文化基金助成事業)

◇日テレ体験教室 7月28日(土)

日本テレビ技術統括局のスタッフが、小学4～6年生とその保護者を対象に、カメラや照明、音声、編集といった、放送技術の面からの番組作りについて分かりやすく解説した。その後、編集機を触ったり中継車に乗ったりする体験を行った。参加者120名。



(子どもゆめ基金助成事業)

◇ラジオ・D J体験教室 8月7日(火)

FMヨコハマ『Tresen』の番組スタッフが、中学生と共に10分のミニ番組を制作し、FMヨコハマ内のスタジオで班ごとに発表した。参加者12名。またFMヨコハマのスタッフが、小学4～6年生を対象にラジオの歴史やラジオ局で働く人々について解説し、小豆や傘、ビー玉など身近な道具を使用して効果音を作ったり、ニュースやラジオドラマ等で構成されるミニ番組を制作した。参加者13名。(放送文化基金助成事業)

■サテライト・ライブラリーおよび大学教育での番組利活用

【大分県立図書館】

「大人のための教養講座」と題して、6月15日～8月9日の期間で「六郷満山開山1300年」に関連した番組4本、8月17日～9月17日の期間で「山の日、環境、祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク認定」に関連した番組7本の上映会が開催された。10月～12月にかけては「明治維新150年」に関連した番組4本の上映会の開催を予定している。



【宮崎市立図書館】

7月13日より個別ブースを常設し、宮崎市及び宮



崎県に関連するテレビ、ラジオ番組21本の視聴が開始された。8月には更に2番組の追加を行い、現在では23番組を視聴することができる。同館の要望に応じて、引き続き番組の追加を行う予定。

■第4回番組を視聴する会 開催

テーマは「明治維新150年」

9月14日～30日、「アーカイブ番組でひもとく、ひと・文化・文明」と題し、番組を視聴する会を開催した。今回は、人物伝や文明開化などを題材にしたテレビ・ラジオ合わせて12本の番組を取り上げた。同時期に開催した「NHK大河ドラマ『西郷どん』全国巡回展（主催：NHK横浜放送局）」との相乗効果で、15日間の来場者は745人であった。上映した番組は次のとおり。『ふるさと紀行明治は甦る 三重県庁舎』『同 西郷従道邸』（東海テレビ）、『ヨコハマはじめて物語 日刊新聞』『同 鉄道』（テレビ神奈川）、『竹丸のおもしろ歴史寄席』『維新伝心 西郷どんの教え』（南日本放送）、『ドラマ人間模様 國語元年 第1話』『NHKスペシャル 太郎の国の物語 第5回 侍の終焉』（NHK）、『桂三枝の歴史再発見ドキュメント 明治四年のクーデター 都道府県のネーミングの謎に迫る！』（中京テレビ）、『ほっかいどう百年物語 松浦武四郎』（STVラジオ）、『ふくしまの素顔 土魂の会津人 ～維新からの人物列伝～』（福島中央テレビ）、『歌之介のさつま維新のボッケモン』（鹿児島テレビ）。

【宮崎県立図書館】

7月21日に講演会「和合の里 土呂久」に合わせて、1991年に宮崎放送で放送され、「地方の時代映像祭 1991審査委員会推賞」を受賞したテレビ番組『生きとうございます 日記がつづる土呂久訴訟』の上映会が行われた。上映会には当時番組を制作した宮崎放送の関係者や被取材者も参加し、上映後には制作当時の思いなどが熱く語られた。



【各大学での番組利用 2018年度前期】

今年度前期は、5校で5つの授業にテレビ番組36本、ラジオ番組2本が利用された。「放送史」（東京工芸大学）や「映像ジャーナリズム論」（長崎県立大学）、「デジタルアーカイブ論」（上智大学）などのメディア系の授業での科目に加え、「医療福祉論」（三重短期大学）、「英語で読む日本近代史」（京都大学）といった、メディア系以外の分野からの利用申込みもあり、幅広い授業で番組が活用された。

■放送ライブラリー公開番組の紹介

放送ライブラリーではテレビ番組16,471本、ラジオ番組4,425本、テレビ・ラジオCMを11,071本、劇場用ニュース映画2,683項目を公開している。30年3月から9月に追加公開した主な番組は以下の通り。

【テレビ番組】

- ◇『連続テレビ小説 おひさま〔1〕、〔156・終〕』2011年4月4日、10月1日放送・NHK
- ◇『WATCH ～真相に迫る～ 被爆米兵（英語字幕版）』2016年5月1日放送・広島テレビ放送
- ◇『五島のトラさん ～父親と家族の22年～ 2時間スペシャル』2015年5月30日放送・テレビ長崎
- ◇『大江戸事件帖 美味でそうろう〔1〕、〔2・終〕』2015年12月4日、5日放送・ピーエス朝日
- ◇『SBCスペシャル 棄民哀史』2015年5月27日放送・信越放送

【ラジオ番組】

- ◇『IBCラジオスペシャル 使命 未来へ贈る津波甚句』2017年5月14日放送・IBC岩手放送
- ◇『神田・神保町 レコード屋のおかみさん』2017年12月7日～31日全国35局で放送・地方民間放送共同制作協議会